



dec monthly

2016.4.1 vol.367 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)
雪はねボランティアツアー開催報告
● dec Report (デックリポート)
野生生物と社会 ～野生生物と人間社会の共生をめざして～

dec Interview >>> 北海道中央葡萄酒株式会社 代表取締役社長 三澤 計史 氏

道産ワインのこれからの課題は
フオリティーを突き詰めていくこと。
私たちが先陣を切って挑戦し、
その取り組みが広がることで
道産ワイン全体の底上げにつなげたい。

と痛感したのです。すでに姉(三澤彩奈氏)は醸造技術などの研究のため、フランスに留学していましたが、それなら私は米国へと、2005年にカリフォルニア州に単身、渡りました。

デアンザ・カレッジ(De Anza College)に学び、さらにサンゼ州立大学に進学。専攻はビジネスか、ワイン学か、などと迷ったのですが、結局、化学を選びました。化学専攻を生かした現地での就職を目指しましたが難しく、大学は中退して日本製品を扱うアパレル用品の輸入会社に就職し、貿易業務に従事しました。

在米6年に入った2011年春、父の要請もあり、ビザの更新期を区切りし帰国し、山梨の家に復帰しました。この年、中央葡萄酒(株)は社内の一部門であった千歳ワイナリーを分社化して北海道中央葡萄酒(株)を設立。帰国後半年ほどで、私はそこへ異動を命じられ、北海道にやってきました。翌12年4月、同社代表取締役社長に就任しました。

社長になられて今春で4周年。御社の「北ワイン」ブランドは、国産ワインがしのぎを削る「日本ワインコンクール」で、たびたび上位入賞されています。慣れない北海道でワイナリーづくりに携わってこられたことが、今、感じておられることは、どんなことでしょうか。

気候や生活文化の違いはものづくりにも大きく影響します。山梨では当たり前だったことが北海道ではそうならない、

近年、北海道におけるワイナリーの増加はめざましく、道産ワインの評価も高まっています。その躍進をリードするワイナリーの一つが千歳市の北海道中央葡萄酒(株)。山梨県勝沼町出身の若き社長・三澤計史さんに、ワインへの熱い思いを伺いました。

ご実家は、国産ワインの発祥地で、今なお「ワイン王国」と呼ばれる山梨県で4代続く名門ワイナリーです。北海道でワイナリーづくりに携わるまでの歩みをお聞かせください。

勝沼町(現・甲州市)という甲州ぶどうの産地で生まれ育ちました。ブドウ畑のなかを通学し、家に帰れば醸造所があるという環境でしたから、自分も大人になれば、ワイナリーの仕事をするのだろうと子ども心に思っていました。その後、高校卒業後、父(三澤茂計氏)が経営する中央葡萄酒(株)に入社しますが、その後、現在の仕事に就くまでには、いろいろな曲折がありました。

20代には、ワイン業以外の世界も知りたくて2年ほど東京生活を経験。その後、山梨に戻ってから、山梨大学でワイン業界向けの専門的なセミナーを受講したのですが、その体験が米国留学のきっかけになりました。セミナー講師はカリフォルニアから招かれた専門家でしたが、私には講演内容がほとんど理解できない(笑)。しかし、受講者のなかには理解している人もいて、語学を含め、自分には足りないものがたくさんある

平成28年度 dec 定時総会のお知らせ

平成28年度の定時総会を下記のとおり開催いたします。
会員の皆様には、後日文書にて「ご連絡申し上げますので、ご出席賜りますようお願いいたします。」

予 定
❖ [日 時] 平成28年5月27日(金) 17時～
❖ [場 所] 京王プラザホテル札幌 3F「雅の間」
❖ [懇親会] 同日 18時～ 3F「扇の間」

※詳細については、4月中旬に改めてご連絡いたします



シーニックバイウェイ北海道 ～千歳ウェルカム花ロード～ クラウドファンディング第1弾のお知らせ

おもてなしの花ロードをつなげたい! ～最初は1km、現在は6.7kmつなげると8kmの花の道～
千歳ウェルカム花ロードは、北海道の空の玄関口である新千歳空港周辺を花で飾り、北海道を訪れる方々をお迎えすること、次代を担う子どもたちに「おもてなしの心」を育むことを目的としたシーニックバイウェイ北海道の活動です。今年は、新千歳空港周辺をもっと多くの花で飾り、北海道を訪れる方をお迎えしようと、クラウドファンディングに挑戦します。(担当:dec藤井)
○ 応援は、こちらのサイトから。→ <http://actnow.jp/>
※クラウドファンディングは、プロジェクトに共感・賛同をした人から、小口で資金を調達するサービスです。

編集後記 先日、中川町で開催された「第3回きり祭」にdec女子3名と原理事4名で参加してきました。古くから林業の町として知られている中川町。お祭は、林業に携わる人たちが元気になることを目的で開催されています。dec女子は、祭のメインイベント「きり丸太レース」に出場。約250kgの丸太を30m引くレースで、実は、第1回目に出場し、なんと地元チームを押さえ半優勝を勝ち取るという空気を醸成しないことをしてしまいました。今年は、1回戦突破を目指したものの、初戦敗退…。開催からわずか2年の間に祭の規模も大きくなり、出場者や観客も増えていました。それだけ地域に根付いたお祭りになったのだと、一人感慨深くなっていました。笑(M,K)



dec monthly vol.367 2016年4月1日発行 発行人 本多 洋 発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市中央区北11条西7丁目2番17号 TEL (011) 738-3363 FAX (011) 738-1889 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_info001@decnet.or.jp

ということは数多くあります。一番大きなことは雨が降る時期が異なること、そして雪に対する備えが求められることです。

原料ブドウは、余市町の栽培農家「木村農園」とケルナー種0.8%、ピノワール種1%を区画で契約。契約区画外からの調達も含めると年間20〜25トンのブドウを仕込んでいます。ワインの原料はブドウだけではなく、ワインづくりの根底にあるのは原料ぶどうの品質です。だからこそ、天候に一喜一憂し、ブドウの出来で、いい年、悪い年があるのです。代々受け継がれてきた栽培技術と醸造技術、さらに科学的な研究成果も導入して、少しでもいいワインをつくりたいと毎年、挑戦してきました。

この4年間で私が最も力を入れてきたのは、中央葡萄酒(株)の一部門であった千歳ワイナリーのワインを名とともに親会社から切り離し、独自の北海道ブランドにすることでした。そのため、親会社の商標とは別の「北ワイン」の商標を打ち出し、商品ラインナップを再編成しました。以前、千歳ワイナリーには多種多様なワインがあって複雑でしたが、「自分たちの顔になるワイン」を明確に打ち出すため、思い切って削りました。今は白、赤それぞれ2種類程度と、千歳ワイナリー創業以来のハスカップワインが主要製品です。



千歳ワイナリーを代表する白ワイン「北ワイン ケルナー 2014」

国内市場における道産ワインの人気は高まっています。そうした現状や今後について、どうぞ聞かせていただけますか。

5年ほど前には、道産ワインがこれほど売れるようになるとは、誰にも予想できなかったでしょう。私が北海道にきた当初、札幌のレストランやホテルに営業して回ると、熱心に応援してくださる方がいる一方で、時には門前払いをくらうこともありました。

当社は2012年ころから道内各地で

ワイン会などのイベントを自主開催し、お客様に私たちのワインの付加価値を自分たちの言葉でしっかり伝えようと努めてきました。そうした積み重ねも、現在の道産ワインに対する注目度アップと無縁ではないと思います。

北海道のワインがさらに市場で価値を高めるためには、何よりクオリティに敏感になり、それを突き詰めていくことです。当社がそれに先陣を切り取り組み、その姿勢や挑戦が他社に刺激を及ぼすことで、道産ワイン全体の底上げに結びつけばと思っています。

というのも、地域ブランドは1社だけでは成り立たないのです。競争原理も働き、互いに情報共有もしながら集合体で取り組むことが重要です。「パイオニア」を名乗るのは生意気かもしれませんが、「北海道のワインを認めてほしい」という思いは誰よりも強いと自負しています。

最近、道内で広がってきたワインツアーの受け入れも行っており、シーニックバイウェイ北海道のツアーでも立ち寄っていただいています。酒店や飲食店はもちろんですが、さまざまな分野に道産ワインを応援して下さる方がいることはありがたいし、そうしたネットワークは欠かせないと思っています。



シーニックバイウェイ ワイナリーツアー

今年は千歳青年会議所(JC)の副理事長に就任されるなど、地元のみならず、全国的にも積極的に参加されていますね。

お誘いを受けて千歳JCに入会したのは2014年で、「千歳ウェルカム花ロード」(2003年に千歳JCの発案で始まった空港周辺道路の花植えによる景観づくり活動)では、実働部隊として作業に参加しました。道内に来て日も浅く、「外の人間」と思われがちですから、地域の一員として役立っていきたくと思っています。

現在、千歳JCのメンバーは34人。私は今年から、運動方針の一つである

「『地域の魅力』輝く千歳創造運動」を展開する「まちの魅力推進委員会」担当の副理事長として活動しています。地域資源を有効活用してにぎわいを創出することが目標です。

他に、JR千歳駅周辺の再整備について市民の目線から検討する「えきまち空間ワークショップ」(千歳市企画部交通政策担当・2014〜15年度)にも参加し、地域の再生について考える機会を得ました。千歳市は、交通の要衝であると共に、東の農村地帯から西の支笏湖を擁する国立公園地域まで多様な顔を持ち、とても恵まれた地域だと思います。市民としても企業としても、千歳市のまちづくりにかかわり続けたいと思っています。

最後に、今後の目標についてお願いします。

やはり目標は、「日本のワイン、北海道のワインが世界のワインになっていくこと」です。

米国留学時代、日本のワインに対する世界の目はまだ厳しく、産地として認められていない悔しさを感じたものでした。山梨県では、2009年より地元ワイナリーや商工団体が連携して「KOJ (Koshu of Japan)」というプロジェクトを立ち上げ、世界市場における甲州ワインの認知向上に取り組んでいます。父が初代代表を務め私も何度か海外プロモーションに出かけましたが、近年、かつて厳しかった日本のワインに対する世界の目は明らかに変わってきていると感じました。

日本で、そして北海道で、私たちは真剣にワインづくりに打ち込んでいるのですから、世界的評価も高めていきたいですね。そのためにやるべきことはたくさんありますが、一つひとつ取り組んで、いつか、「北海道」という冠をとって世界に受け入れられるワインをつくることができたら、と思います。

実は、現在の道産ワインに吹いている強い風について、私は懐疑的です。道産にこだわるファンが増えているのありがたいことですが、これにあぐらをかいていたらまずい、という危機感があります。ワイン業はものづくりですから、つくり手の情熱が何より大切で、私たちのやる気がなければ何も進まない。しっかりとやっていきたいと思っています。

※千歳ウェルカム花ロードのお知らせは裏表紙へ→

雪はねボランティアツアー開催報告 雪はねボランティアを通して広域交流から創発される 地域社会イノベーション



「雪かきぞ!!美流渡!!かんぱろ〜」



「天気が良くて美流渡がさらにきれい」「雪かき楽しい♥夏の美流渡にも来た!」



「地元のためにかんぱります!!」



「Happy☆☆☆」

撮影:ハレバレシャシ

「雪はねボランティアツアー」 4冬季目へ突入!!

過疎高齢少子化による雪かきの担い手不足は、北海道のみならず全国の豪雪過疎地域において喫緊の課題です。この雪処理問題に対して、道内の大学や企業などと連携し「ボランティア活動による広域交流イノベーション推進研究会」(事務局dec)を立ち上げ、札幌発着型の「雪はねボランティアツアー」を企画・運営してきました。また、ツアーの運営のみならず、ボランティア活動と広域的な人的交流を契機とし、ボランティアたちは何を獲得し、地域社会には何が芽生えていくのかを実践的に研究してきました。このような経緯をもつ研究会は、4冬季目に突入り、上富良野町・岩見沢市・倶知安町・三笠市の4地域、計6回の「雪はねボランティアツアー」を実施しました。

チャレンジテーマは、 「地域社会イノベーションの発芽」

今年度の推進研究会のチャレンジテーマは、「地域社会イノベーションの発芽」と表現できるでしょう。3冬季に渡って継続的に実施した「雪はねボランティアツアー」は、図らずも地域社会の活性を促す「イノベーションの種」を播いていました。それらは、地域防災力の向上、移住定住の促進、参加企業の拡大、地域資源の再発見など地域ごとにさまざまな種です。これらの種は、地域社会にどのような創発性をもたらし、4年目の冬のような芽となって吹き出したのでしょうか。

次頁にて、地域によって形の違う「新芽」を、中前研究員・小西研究員が報告いたします。



ボランティア活動による
広域交流イノベーション推進研究会

地方部と都市部の広域的なボランティア活動による人的交流を通して、地域活性化に向けて新たな価値を生み出し、社会的に大きな変化を起こす(イノベーションを起こす)ことを目的として、2012年8月に設立されました。会長 小瀬修二氏(北海道大学公共政策大学院特任教授)。詳しくは、<http://volu-vation.net/>をご覧ください。



地元の人とふれあう外国人参加者(上富良野町)



雪の下じゃがいもを掘る様子(倶知安町)

撮影:ハレバレシャシ



2年越しの豚汁(岩見沢市美流渡地区)



恒例の企業スクラム(三笠市)

撮影:ハレバレシャシ

「雪かきボランティアで“国際交流”」上富良野町 「雪かきボランティア×体験型観光で地域づくりを応援」倶知安町

dec研究員 中前 千佳

平成18年から始まった上富良野町での雪かきボランティアツアーは、今年で11年目を迎えました。2月13日(土)、厳冬期の2月には珍しく小雨が降る中、札幌から出発したバスは、アメリカ、ロシア、韓国、シンガポールなど、国際色あふれた老若男女33名の参加者を乗せ、上富良野へ向かいました。

昨年の10月、道庁と札幌市の若手職員からなる北海道・札幌市政策研究みらい会議のメンバーより「外国人観光客にとって雪かきボランティア体験が観光資源となり得るか調査をしてみたい」という提案を受け、外国人の方にツアーの告知・PRを積極的に行い、その結果、7名の外国人の方に参加してもらうことになったのです。結果は大成功！受入地域の上富良野のお父さんたちは、雪かきが初めての外国人参加者を暖かく受け入れてくれ、「どこから来たのか」「上富良野はいいところだから、ずっとここにいたい」などと会話をしながら、外国人の方々と一緒にスコップを握り、汗を流しました。外国人参加者は、慣れない雪かきを思う存分味わ

い、その後も、温泉と美味しい食事を堪能し、地域の人との交流を楽しみました。雪かきボランティアを通して、地域の人と外国人参加者が自然と国際交流をすることが出来ていました。

倶知安町の雪かきボランティアツアーは今年で4冬季目。年々パワーアップする倶知安町のツアーは、参加者数の多さも凄いのですが、今年は地域のNPOや蔵元と一緒に今までにない新しい取り組みにも挑戦しました。

今年のツアーは、1月24日(日)と2月7日(日)に開催。ツアー参加者に地域のことをより深く知ってもらい、好きになってもらうために、午前中は琴和町内会と六郷親交会のお父さんや倶知安中学校の生徒たちと一緒に雪かきボランティアを行い、午後は、一面雪に覆われた畑で雪の下野菜を掘ったり、地元の酒造の酒蔵見学を行うという体験型観光を取り入れた盛りだくさんのツアーを開催しました。

参加者は、地域の人との雪かきボランティア作業を通して、豪雪地帯に住む皆さんの日々の雪かきの大変さ

や、互いの暮らしを支え合う町内会の活動を知ったり、午後の雪の下野菜掘り体験では、野菜を雪に埋めると糖度が高くなって美味しくなることや、酒蔵見学では、かまくら状態の豪雪の蔵の中で行われている昔ながらの手造りによる日本酒の製造過程を学びました。

さらに、ツアーで来てくれた参加者に、地域特産品をお土産として買ってもらうため、この糖度が高くなった野菜＝じゃがいもを使ったポタージュスープをNPO法人WA0ニセコ羊蹄再発見の会が中心となって開発し「雪の下育ちのくっちゃんポテトスープ」と名付けて、地元を中心に販売を開始しました。また、酒蔵見学を受け入れている二世古酒造でも、北海道倶知安産の酒造好適米「北粳」を原料とした日本酒「純米大吟醸」を初めて製造し、日本酒タンクオーナーの募集を開始するという取り組みを始めました。

このように、雪処理問題の解消を目的として始まった雪かきボランティアの活動は、ツアーを通して様々な人々の出会いを生み、その結果として、新しい地域づくり活動の芽が生まれ始めています。

「ようやく豚汁が作れたよ」岩見沢市美流渡地区 「“雪かきボランティア×CSR”を徹底的に考えたこの冬」三笠市

dec研究員 小西 信義

岩見沢市美流渡地区及び三笠市は炭鉱街として隆盛を極めました。エネルギー革命による基幹産業の撤退により、著しい社会減が進行している地域です。加え、両地域は空知地方の多雪地域でもあります。この2地域でも「イノベーションの種」から新芽が芽生えようとしています。

岩見沢市美流渡地区では、1月23日(土)及び30日(土)に2回の「雪はねボランティアツアー」が受け入れられ、延べ75名のボランティアたちが独居高齢者宅の雪かきを行いました。

4冬季目の受け入れとなる同地区では、美流渡連合町内会とNPO法人M38理事長菅原新氏(2013年冬季の「雪はねボランティアツアー」を契機に同地区に移住した)を中心に受け入れ準備が進められ、今年度は、美流渡地区の女性たちによる初の豚汁がボランティアに提供されました。この「豚汁計画」は、2冬季前から構想されていた計画で、念願の実現となりました。この4冬季間、美流渡地区は「よそ者」を受け入れる苦労と苦悩に向

き合うたびに豚汁づくりを断念してきました。これら乗り越えた結果としての「もてなしの豚汁」は、受援力(地域外からの支援や援助を受け入れる能力)の獲得を象徴しているのかもしれませんが、歩みはゆっくりかもしれませんが、「よそ者」を受け入れ、彼らと良好な関係を構築していくこととする志向と行動を獲得していくプロセスこそ、雪処理問題の解消のみではなく、地方部の自立性と自律性の獲得へのヒントが隠されているのかもしれません。

三笠市では、2月6日(土)に道内企業の連携プロジェクトとして「雪はねボランティアツアー」が開催されました。こちらは、北海道コカ・コーラボリテック株式会社岩見沢営業所と三笠市社会福祉協議会が二人三脚で受け入れ準備を進めました。ツアー当日、各企業のロゴが印字されたピンス(ベスト)の衣服 ※写真右端参照)をまとう8社41名が、市内4軒の雪かきボランティア活動を行いました。午後、①自社で雪かきボランティア活動を展開する場

合の課題とその解決策、②企業による雪かきボランティア活動が道内に拡大するために必要な条件の2つのテーマで意見交換を行いました。テーマ①に関しては、人・金・道具・社内外問題と多くの課題が提示されましたが、それらの課題も活動によって得られる効果を明確化しながら、粘り強く続けていくことが一番の解決策だという結論となりました。テーマ②は、雪かきボランティア活動を含め、CSR活動に積極的に取り組んでいる企業の成果を数値化し、表彰するなどの仕組みの実装や社内のCSR経営の浸透などが条件として挙げられました。

この2つの新芽は、雪処理問題の解消だけではなく、北海道の地域づくりにおいても多くの示唆を与えてくれるでしょう。ボランティアという「よそ者」がもたらす広域交流は、関わった人たちの創造性を掻き立て、地域社会のイノベーションを起こする引き金として機能しはじめたのかもしれない。道遠けれど、一冬ごとに歩みは確実に進んでおります。

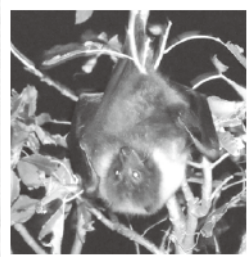
「野生生物と社会」学会

～第21回 沖縄大会 参加報告～
dec主任研究員 野呂美紗子

自然豊かな琉球大学

学会が開催された琉球大学には、那覇市街地から高速道路経由で40分ほどバスに揺られて移動しました。高速道路に設置されたバス停で降りると、大学はまったく見当たらず、不安な気持ちで高速道路上の高台に移動していくと、すぐ近くに大学がありました。

琉球大学は高台にあり、大学の真ん中に千原池という大きな池があります。池には、様々な野鳥が羽を安めており、貴重なバードウォッチングスポットになっています。池の上にかかった歩行者用の橋(球陽橋)で橋内を移動できます。夜にはオオコウモリが飛来し、歩道脇の木々が探照灯のオオコウモリ



橋内の木々で探照灯のオオコウモリ

盛り上がったテーマセッション「野生生物と交通」

我々、ロードエコロジー研究会のメンバーが中心になって、毎年本学会にて「野生生物と交通」に関するテーマセッションを企画しています。今回は、沖縄での開催ということで、沖縄のメンバーからお話をいただき、合同での開催となりました。

沖縄といえばここにしか生息していない貴重な固有動物がたくさんありますが、その動物たちが置かれている問題の一つがロードキルです。テーマセッションでは、環境省のやんばる野生生物保護センターの山本以智人さんが中心になって演者の調整をしていたり、沖縄や奄美の野生動物のロードキル対策に関する事例を紹介することができました。

セッションの中で、沖縄本島のやんばる地域での、「やんばる地域におけるロードキル発生防止に関する連絡会議」の紹介がありました。10年ほど前から環境省、道路管理者、NPO、地元の方など、多様な背景を持つ人たちが一つのテーブルについて、ヤンバルクイナなどのロードキル防止に向けて、事故発生状況

や対策などの情報を共有する協力体制の報告があり、ロードキルを減らすためには、様々な方たちと一緒に取り組むこと(巻き込んでいくこと)が重要と感じました。また、スマートフォンのアプリを活用した注意喚起ツールの開発や、タヌキなどの中型動物とのロードキル削減に向けた行動実験の紹介などもありました。

印象的だったのは、ロードキル問題の多様性です。沖縄や奄美などの希少種の保全のための取り組みがあれば、本州で最もロードキルが多い中型哺乳類、特に里山の動物の代表種といってもいいタヌキのロードキルに着目したものや、北海道のように大型動物であるエゾシカとの衝突事故での人的被害の改善を主眼としたものもあります。同じロードキル問題といっても、アプローチの仕方や人間社会での受け取られ方、主に取り組んでいる方や組織に違いがあることが興味深い点でした。会場は、沖縄の生物への熱い思いを込めた熱の入った議論が盛んに行われ、これまでにない盛り上がりとなりました。

「野生生物と交通」に関する話題、琉球列島の今を知る

渡利格伸(徳島大、ロードエコロジー研究会)、鹿野たか貴(野呂美紗子 dec、ロードエコロジー研究会)、山田芳樹(徳大、ロードエコロジー研究会)、山本以智人(環境省やんばる野生生物保護センター)、長瀬隆(金城道男、金城貴也、NPO法人どうぶつたちの病院 沖縄)



2015年11月21日(土)～24日(火)に、沖縄県の琉球大学にて第21回「野生生物と社会」学会年次大会が開催されました。約280名もの多くの方の参加となった今大会では、南西諸島の希少動物に関する話題を中心とした様々な事例や研究が報告されました。本報告では、毎年の年次大会で開催されている「野生生物と交通」に関するテーマセッションの様子を中心に報告します。

いざ、現場へ!

後日、テーマセッション内でもご紹介のあったやんばるのロードキル対策について、NPO法人どうぶつたちの動物病院沖縄の金城貴也さんに現地をご案内していただきました。

ヤンバルクイナのために設置されたアンダーパス(供用中の道路にボックスカルバートを新規に設置)やモニタリングの様子をお聞きすることができました。

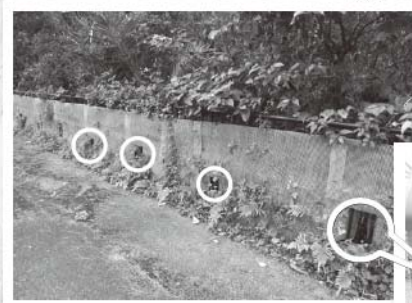
何とんでも個人的に興味深かったのがクイナフェンスとヤンバルクイナ用のワンウェイゲート。学会内でもアース展示されていたが、現場で本物を見ることが出来ました。この他、道路脇の草が生い茂り、ドライバーがヤンバルクイナの発見が遅れちゃうため、法面植生にコンクリートを張って植物が生えない状態にして視認性を確保する対策や、ロードキル件数を提示しながら注意を促す注意看板なども設置されていました。

最後に

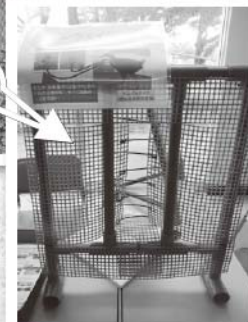
テーマセッションの成功に協力いただいた企画メンバーの皆さまと講演者、参加者の皆さま、そしてやんばるを案内していただいた金城貴也さんに心から御礼申し上げます。



道路脇の視認性改善のための張りコンクリートと防草シート



クイナネットとワンウェイゲート



ヤンバルクイナ用のワンウェイゲート



警戒標識と注意看板



ヤンバルクイナ用の横断ボックス

テーマセッションでの事例紹介

- ◆琉球列島の生物相とロードキルの現状—希少種・固有種の交通事故対策 山本以智人(やんばる自然保護官事務所)
- ◆奄美大島での問題—アマミノクロウサギの交通事故対策 木元侑菜(奄美自然保護官事務所)
- ◆西表島での問題—イリオモテヤマネコの交通事故対策 田口麻子(西表自然保護官事務所)
- ◆琉球列島での事例(1)—沖縄県土木事務所の取り組み 平良啓達・柘植優(沖縄県北部土木事務所)
- ◆琉球列島での事例(2)—やんばる地域での技術開発 福島新(日本工営株式会社)
- ◆琉球列島での事例(3)—スマートフォンアプリを活用したロードキル対策 蒲池康浩・可児里砂(株式会社インターリスク総研)
- ◆琉球列島での事例(4)—民間団体の取り組み 金城道男(NPO法人どうぶつたちの病院 沖縄)
- ◆一般道におけるホンダタヌキのロードキル発生に関する一考察—神奈川県を事例として 園田陽一氏(株式会社地域環境計画)
- ◆ロードキル抑制対策に関する取り組み—中型動物の立入防止柵に対する行動実験について—金子武史・築瀬知史(株式会社高速道路総合研究所)、諸藤聡子(株式会社協和コンサルタンツ)



テーマセッション開催時の様子

「野生生物と交通：エコインフラと道路の安全性に関する国際シンポジウム」開催報告集発行のお知らせ

「野生生物と交通」研究発表会15周年記念事業として、2015年7月に開催された第5回国際野生動物管理学会会議において、「野生生物と交通：エコインフラと道路の安全性に関する国際シンポジウム」を開催いたしました。シンポジウムでは、生態系に配慮したインフラ整備と道路利用者の安全性に主眼を置いて、カナダとドイツから3人、日本から5人の計8名の話題提供者を招聘して、

インフラ整備の計画手法や具体的な設計などの事例、本州や北海道における交通事故対策の現状、対策の効果予測手法等について話題提供をいただきました。非常に貴重なお話しだったので、話題提供および質疑応答を日本語に翻訳し、報告書として一冊にまとめました。シンポジウム参加者による北海道内(十勝地方)の事故対策事例を視察した様子も合わせて収録しています。ご希望の方は、北海道開発技術センター内「野生生物と交通」係までお問い合わせください。なお、この報告書は、4月中旬には「野生

生物と交通」のウェブサイト(<http://www.wildlife-traffic.jp/>)からもダウンロード可能となりますので、ぜひご覧ください。野生生物と交通に関する問題をの改善に向けた一助となれば幸いです。



【問合せ先】北海道開発技術センター内「野生生物と交通」係(担当:鹿野・向井) wildlife@decnet.or.jp